

営農技術情報

一畑作（秋まき小麦・は種）一

令和元年 8月26日発行

上川農業改良普及センター名寄支所 TEL01654-2-4524
JA道北なよろ TEL01655-3-2521
JA道北なよろ営農センター TEL01654-3-4307

～ は種時期・ほ場条件に応じた作業を行いましょう ～

1 ほ場の選定について

「野良生え」によるコンタミを防ぐために、そばや春まき小麦ほ場の後作は、できるだけ避けるようにして下さい。やむを得ず作付けする場合は、除草剤処理や抜き取りを徹底し、「野良生え」がほ場に残らないようにしましょう。

また、連作により雪腐病や立枯病等の病害が増加するだけでなく、なまぐさ黒穂病を誘発するおそれがありますので、極力、連作を避けましょう。

2 排水対策の実施

排水改善を図ることで、①停滞水および雪腐病等による株の枯死を防止、②融雪後のほ場の乾燥および地温上昇を早め、越冬後の生育を促進、③追肥の効果を高めて過剰施肥の回避等につながります。

は種前に心土破碎、サブソイラ等による排水対策を実施しましょう。

3 pHの矯正

pHが低いと養分の吸収が悪くなり、特に、越冬後の生育が抑制されるおそれがあります。予めpHが5.5～6.0程度になるように矯正しましょう。

4 は種時期とは種量について

道北地域における「きたほなみ」の越冬前の生育の目標は、「葉数5.7～6.4葉、莖数1,000本/m²」で、積算温度では「520～640℃」を確保することが目安となります。名寄地域におけるは種適期は、9月9日～15日です。

は種量は表1を目安としますが、は種床を丁寧造成した上で、できるだけ正確には種を行なって下さい。

なお、粘質が強いほ場、山間地や傾斜地、砕土が粗い場合は、出芽率が低下したり、起生期以降の分けつが少ない傾向にありますので、は種量を目安から10～20%程度増やすようにして下さい。

表1 は種時期とは種量の目安(越冬前莖数1,000本/m²程度が目標！)

は種期	早まき 9月1～8日	は種適期 9月9～15日	晚まき 9月16～22日
は種量	5～7kg/10a	7～9kg/10a	9～12kg/10a

※種子千粒重40g、出芽率90%で算出。

5 は種深度

は種深度は **2.5～3cm 程度が適正** です。「深まき」(4cm 以上) は、発芽不良や二段根の発生だけでなく、分けつの発生も悪くなります(図 1)。は種深度を確認するとともに、鎮圧も実施しましょう。特に、土壤水分が多いときや、砕土が細かくなると、は種機の自重による「沈み込み」が大きくなりやすいので、注意して下さい。

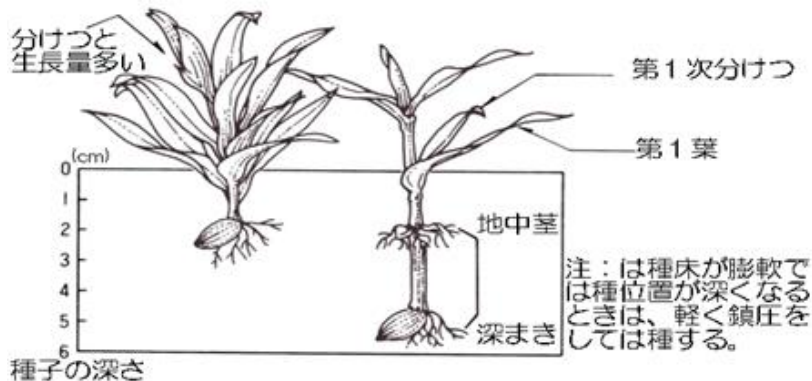


図 1 種子の深さと生育の関係 (北海道作物管理全書より)

6 基肥について

窒素量は 4 kg/10a を基本としますが、地力や前作を考慮した上で増減するようにして下さい。なお、水田からの転換直後や新畑等、銅の欠乏症が懸念されるほ場では、銅入りの肥料銘柄を使用しましょう。

越冬後の融雪条件により起生期の追肥が遅れるほ場では、「肥料切れ」となり、分けつの発生や葉色の回復が遅れることがあります。基肥に硝酸化抑制剤入り肥料銘柄 (Dd 等) を使用することで、越冬後の「肥料切れ」を改善している事例もありますので、表 2 を参考にして下さい。

表 2 秋まき小麦の施肥例(基肥)

銘柄	施肥量	成分量 (kg/10a)		
		窒素	リン酸	カリ
BB121Cu※1	40kg/10a	4.0	8.0	4.0
BB121	40kg/10a	4.0	8.0	4.0
BB082	40kg/10a	4.0	7.2	4.8
BB086	40kg/10a	4.0	7.2	2.4
DdS708※2	70～80kg/10a	11.9～13.6	7.0～8.0	5.6～6.4

※1 銅入り肥料銘柄

※2 「DdS708」は、窒素 17.0% (うちアンモニア態窒素 15.3%、ジシアンジアミド (硝酸化抑制剤) 態窒素 1.7%、リン酸 10.0%、カリ 8.0%。基肥で起生期窒素分を上乗せして施用

7 雑草対策

イネ科の雑草 (スズメノカタビラ等) やイヌカミツレ・レッドトップなど難防除雑草に対しては、春以降の茎葉処理では、十分な効果が得られないおそれがあります。**雑草が多いほ場では、は種後の土壤処理を必ず実施** しましょう。また、散布する際は、使用基準範囲内の多い薬量で散布するようにしましょう。

表3 秋まき小麦の除草剤例（登録内容は令和元年8月19日時点）

薬剤名	使用時期	使用量 (ml/10a)	使用回数	対象雑草
ガレース乳剤	は種後～出芽前 (雑草発生前)	200～250	1回	1年生雑草
	小麦出芽後～出芽揃期 (雑草発生前)	150～250		
	小麦1～3葉期 (雑草発生前～発生始)	100～150		
ムギレンジャー乳剤	は種後～出芽前 (雑草発生前)	300～600	1回	1年生雑草
ガルシアフロアブル	は種後～出芽前 (雑草発生前)	150～250	1回	1年生雑草
	出芽直前～小麦3葉期 (雑草発生前～発生始)	100～200		
エコパートフロアブル	小麦2～4葉期 (広葉雑草2～4葉期)	50～100	2回	1年生広葉雑草

※ナタネタビラコに対しては、「エコパートフロアブル」で効果があります。

8 「大豆間作栽培」について

大豆の連作回避および秋まき小麦のは種遅れを回避する目的で、「大豆間作栽培」（大豆畦間ばらまき栽培）という方法があります。大豆の立毛中に小麦の種子を散播するため、は種前の耕起作業が不要となり、省力的です。

ただし、は種後の土壌処理除草剤が使用できませんので、雑草の多いほ場では実施を避けるようにして下さい。また、雪腐病の被害を受けやすいため、排水性の劣るほ場を避け、雪腐病の防除をスプレーヤ等で行うようにして下さい。

表4 「大豆間作栽培」の実施方法（目安）

項目	実施方法	作業上の留意点
は種時期	8月末～9月上旬 大豆の黄変始め（落葉前）	出芽向上のため、降雨前が望ましい 大豆の落葉が覆土代わりとなるため 時機を逃さないようにする
は種量	15～20kg/10a	当地域での出芽状況および越冬性を 考慮すると、道指導参考の255粒/ m ² （9.5～10.5kg/10a）より多い方が 生育・収量が安定する傾向
は種方法	ブロードキャスター ミスト機 等	ブロードキャスターの場合は種子の 飛散状況を確認する
施肥 (越冬前)	基肥として大豆落葉後に標準量を 施用する（窒素成分で4kg/10a）	地力が高いほ場では省略可能

農薬の安全使用について

- 農薬散布に当たり、近接する作物へ飛散しないように十分注意しましょう！
- 農薬は必ずラベルを読み、使用量・時期・回数を確認し適正に使用しましょ